

いしかわ自然史

96号

発行日
2026年3月25日

能登半島地震で約4m隆起した輪島市門前町の鹿磯海岸（左、2024年3月15日撮影）では、隆起前の波打ち際で乾燥したカサガイ類などが見られたが（右上、2024年3月15日撮影）、秋には新しい波打ち際で新たに定着した個体も見られている（右下、2024年10月29日撮影）

隆起した岩礁海岸における潮間帯生物 のと海洋ふれあいセンター 荒川 祐亮

能登半島の里海を代表する生物として海藻があげられる。約30種類の海藻が食用として利用され、外浦海岸の冬の「かじめ拾い」や「岩ノリ採り」に象徴されるように、海藻は能登の文化に根付いている。冬から春にかけてホンダワラ類が繁茂するガラモ場は海中林とも呼ばれ、生物の隠れ家や産卵場所、サザエやアワビの餌資源として生物多様性を支えている。

2024年の能登半島地震による地盤隆起は、輪島市から珠洲市にかけての外浦海岸で発生し、最大の隆起高は約5mに及んだ。海中の岩場が陸上に現れ、付着した紅藻のサンゴモ類は乾燥して白化し、沿岸には白い台地が広がった。歩くと、黒く乾燥したホンダワラ類や転がる貝類、岩の隙間にはムラサキウニなど、かつての海中景観を思わせる光景が見られた。震災直後の2024年3月の波打ち際では、震災後に定着したとみられるアオノリ類や、深場から浅瀬に持ち上げられたホンダワラ類の生育も確認された。このようなホンダワラ類は乾燥を免れたが、波にさらされるようになり藻体が短くなるという変化も確認された。

沿岸生物は水深や潮汐による浸水時間、波当たりなど適応する環境が異なり、岩礁潮間帯では垂直方向に生物相が明瞭に変化し、帯状分布と呼ばれている。のと海洋ふれあいセンターでは震災前から潮間帯で、海藻や底生動物のモニタリング調査を行っている。震災後の2024年6月の調査では、

これまで見られたアラレタマキビ、カサガイ類、スガイといった潮上帯や潮間帯の生物が見られなくなり、隆起した海岸で底生無脊椎動物の種数の減少が認められた（東出ら、2025）。一方、2024年秋には新たに定着した潮間帯生物も確認されたが、生息状況は生物種や海岸地形、隆起の度合いによって異なっており、詳細は不明である。

2011年の東日本大震災では地盤沈下が発生し、岩礁海岸で10年間のモニタリングが続けられているが、多くの海岸で生物相は震災前に戻らず変化し続けていることが報告されている（岩崎、2025）。能登半島でも沿岸環境が大きく変化しており、長期的観察が不可欠である。現在、岩崎藍子助教（東北大学）、上野裕介准教授（石川県立大学）、浦田慎教授（金沢大学）、佐藤崇範研究員（能登里海教育研究所）、豊田賢治准教授（広島大学）らとともに生物モニタリングプロジェクトを始動している。今後、能登の里海に育まれてきた生物と文化が、この環境変化の後どのように再編されていくのか見つめ続けたい。

引用文献

東出幸真・荒川裕亮・中出悠介（2025）令和6年能登半島地震後の岩礁海岸における底生無脊椎動物および海藻草類のモニタリング調査。のと海洋ふれあいセンター研究報告, 30: 83-102.
岩崎藍子（2025）岩礁潮間帯生物への地震の影響と能登半島地震後の生物モニタリングプロジェクト。能登の海中林, 63: 2-5.

流れ星

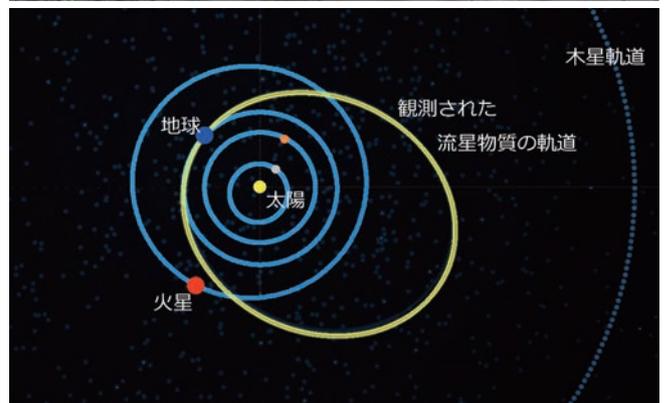
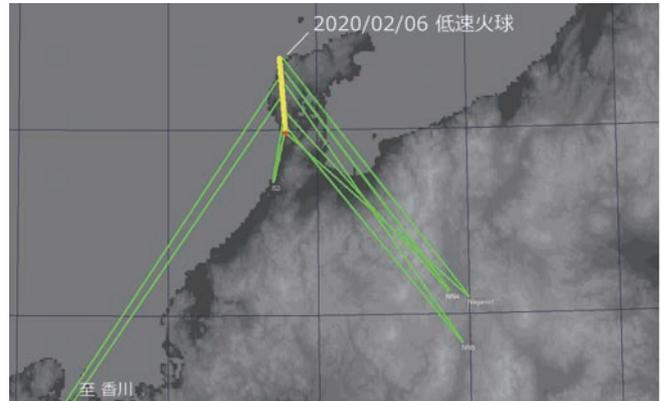
金沢星の会 山川 博

流星はめったに見られないものと思っている人もいるかもしれません。街中ではそうかもしれませんが、晴れていれば、それなりに郊外の暗いところに出かければ1時間に2～3個は見ることができます。流星群の来る夜であればもっと数多くの流星が見られます。

さて流星（りゅうせい）と言ったり、流れ星（ながれぼし）と言ったりするものの正体はなんでしょうか。流星の飛んでいるそばに行って、ひょっと手を出してそれを掴んで持って帰ってくることは出来ません。それでも観測から推測することができました。それは小さければ数ミリというサイズからなる砂粒のようなもの、そして数センチ、数十センチという物質が地球大気に飛び込み、断熱圧縮効果でプラズマ発光するものです（*1）。

流星観測は、流星の飛んだ時間（時分秒）、明るさ（等級）、速さ、場所方向を星図上に書き込むことが基本になります。そして異なる場所で同じ流星を観測できた場合に、三角測量の原理にて、流星が発生した場所を定めることができます。眼視観測であったり、写真観測、テレビ観測であってもその基本は同じです。

一例として2020年2月6日に能登半島中央部に飛んだ準火球（*2）を示してみます。輪島から羽咋方面に飛んだ流星で長野県からの3地点、香川県からの1地点、石川県からも1地点より観測されています。とくに石川からのカメラでは末端にて4～5個に分裂したことがわかりました。そしてこれらの観測により大元の流星物質は火星と木星の間にある小惑星帯から訪れた軌道となることが導き出されます。ちなみに流星の発光は高度80.6kmから始まり27.1kmにて消失しました。実はこれほど大気の深いところまで発光の続く流星は珍しく、流星物質が燃え尽きずに地平に達して隕石となっている可能性があります。流星は大気抵抗により大幅に減速し、発光が止まるのですが、そのあとは風に流されるにまかせます（ダークフライト）。このあたりの計算が得意な方が関西にいました。彼らが当日の気象状況から風の影響を読み込み、シミュレーションを行った結果、中能登町と氷見市県境にある碁石ヶ峰付近に25～110グラム程度の隕石が数個に渡り落ちていた可能性があると示してくれました。ちなみに後日、友人と探索に訪れたのですが隕石は見いだせてはいません。



〇〇座流星群という現象を聞いたことがあるでしょうか。先にも少し触れましたが、特定の期間に見られる流星の数が少し増える現象です。多くの流星群は観測から流星物質の軌道と似通っている彗星が見いだされています。

これにより彗星の残した塵が流星群の元であるというのが現在の定説となりました。

注：*1 大気との摩擦による発熱・発光と解説されているものも多数見受けられますが、流星物質が前方大気に衝突・圧縮することによる発熱・発光するもの。

注：*2 とくに明るい流星を火球と呼びます。概ね-4.3等以上のもの（≒金星の明るさ）。

植物学の学名を読む(2)

石川県自然史センター 顧問 高木 政喜

前回の入門講座で学名が読めるようになりましたでしょうか。

学名は命名規約により適用しやすく改定しやすくすることが必要であるとして、6年ごとに開催される国際植物学会議において改正されている。(前回会議は2024年7月21日～28日、スペインのマドリッドで開催された。)なお、生物命名法は「国際藻類・菌類・植物命名規約」(国際植物学会議命名委員会)によって、生物多様性の解明のために整備されている。

地球上にはきわめて多数の生物が生育しており、生物には生物学上の名前(学名)が付けられている。学名体系は生命科学の土台であり、学名によってその研究対象を特定し、また、生物多様性の事実を具体的に知ることができる。学名は世界共通にしていかに重要であるかが認識される。

学名について命名規約の第I部原則Vには「学名はその由来にかかわらずラテン語として扱われる」と明記されているので、学名の構成等についてラテン語文法に沿って簡単に述べてみたい。

1. 学名の構成

学名は属名+種形容語から構成されている。これは、植物命名規約の第23条に「種の学名は属名とそれに続く1個の種形容語からなる二語組合せである」と記載されていることによる。いわゆるリンネが考案した二名法である。種形容語とはその植物の特徴を表現している語で、種小名を指している。

なお、ラテン語には文法上の性の区別があり、名詞である属名にはすべて性の属性が決まっている。一般的に性の区別は、男性(us)、女性(a)、中性(um)の語尾変化で示す。

属名と種小名の二語からなる学名を植物名として考えた研究者はスウェーデンの博物学者カール・フォン・リンネ(Carl von Linné)である。1753年出版の「Species Plantarum」は今日の植物命名法の基準となっている。

2. 属名と種小名

植物の分類階級は界、門、綱、目、科、属、種という階層的な分類体系に基づいて分類されている。学名の「属名」は前述の「属」を指している。

したがって、種はそれぞれの1つの属に帰属する。さらに属の学名は1個の単語であり、頭文字

は大文字で書かれる。

種小名は属名を修飾するもので、種小名には形容詞または名詞の属格を用い、属名の性に必ず一致させる。

例：キクバオウレン

Coptis japonica var. *anemonifolia* H. Ohba

Coptis：属名. 名詞(女性). オウレン属.

japonica：形容詞(女性). 日本の. var.：変種

anemonifolia：形容詞(女性). イチリンソウ風の葉状. H. Ohba：命名者. 大庭秀昭

3. 学名の表記

学名の書体は、本文と字体を変えれば良いとされているので、通常は斜字体(イタリック)か、下線(アンダーライン)を引くことにより区別している。命名者は学名でないので、ローマン体で表記する。

例：ヒメアオキ *Aucuba japonica* Thunb.

var. *borealis* ※borealis：北の、北方の、

ユキツバキ *Camellia rusticana* Honda

※rusticana：野に生えた

4. 学名命名者

種の命名者はしかるべき印刷物にその種を新種として記載・発表した人で、命名規約では著者(author)と呼ばれる。種名と区別するためにローマン体で綴り、姓のみを記載し、すべてラテン文字で綴る。

著名な姓や長い綴りの姓は、一部を省略することが多い。

例：Carl von Linnaeus → L.

Carl Peter thunberg → Thunb.

原 寛 Hiroshi Hara → H. Hara

学名を読むにあたって基本的なことについてメルボルン規約(2012・右写真・私の蔵書)を基に述べてみた。国際会議の結果は、イギリス英語で書かれているが、日本語、中国語、ポルトガル語などにも翻訳されている。

2回に渡って記したが、学名を読むことに重点を置いたため、説明不足となった点があったことは否めないと思っている。



「国際藻類・菌類・植物命名規約」(メルボルン規約)

能登にチシマザサはあるのか？

石川植物の会 表 富士夫

イネ科タケ亜科植物のササ類は野山でよく見られ、能登では主に次の3属のササが自生しています。メダケ属（メダケ=別名ニガタケ、ネザサ）、ヤダケ属（ヤダケ）、ササ属（チシマザサ、チマキザサ、チュウゴクザサなど）です。メダケ属やヤダケ属は背が高く細いタケのように見えますが、ササの仲間とされています。

ササ属は学名も“Sasa”で、普通にイメージするササの形をしています。どれも似た形なのに種類は多く花もなかなか咲かないため、同定はたいへん難しいものです。

ここでは、ササ属の中でチシマザサ（ネマガリダケ）やその雑種に関するものを取り上げ、能登での自生・分布状況や資料で調べる上での問題点等について書いてみたいと思います。

1 資料による記載の違い

能登の高い山の頂上部にはブナ林があり、その林床にはチシマザサがあると思っていましたが、今現在は「はてな？」の状態です。実際に山に行って調べているのですが、チシマザサ関係の記述が資料によって大きく異なるため同定が非常に難しいのです。以下に、資料による違いが分かるように書いてみます。

- ・チシマザサ・・・別名ネマガリダケで根元が曲がり、上部で分枝。肩毛は発達せず全体無毛で、葉舌は先が円い高い山形。稈が太い等。



<上部で分枝。肩毛は発達せず、葉舌は先の円い高い山形。全体無毛、太い稈でチシマザサか？(宝立山トンネル付近)>

- ・エゾネマガリ・・・北隆館の図鑑（2017年）では、宝立山の高い所にあるササをエゾネマガリ（チシマザサの葉が広くて大きい変種）とし、チシマザサや後述のオクヤマザサとははっきり区別して記載。平凡社の図鑑（2016年）には記載なし。YListでは、オクヤマザサのシノニム（同種異名）。いしかわ樹木図鑑では、チシマザサに含めて分布図に記載。
- ・オクヤマザサ・・・北隆館の図鑑ではチシマザサ・チマキザサ複合体とし、チシマザサとチマキザサ節（チマキザサ、クマイザサ、チュウゴクザ

サなど）の1種が浸透交雑を繰り返して限らない中間形を示す、と記載。平凡社の図鑑ではチシマザサとチマキザサの交雑起源とし、チシマザサとの区別点として「少なくとも葉鞘の縁に毛があり」と記載。また、某ホームページには「チシマザサとよく似ていて、一般には区別されない」と記載。資料により、広義～狭義までかなり幅あり。



<葉舌が突出するも高い山形ではない。葉鞘の縁等に毛あり。(左：高洲山、右：石動山)>

2 実際の山での観察から



震災や豪雨による災害で林道が消失したりし、特に奥能登の山での観察が困難な状態で、鉢伏山は未観察、宝立山も1か所のみでの観察です。どの山も限なく詳細に調べれば、狭義の典型的なチシマザサは、もっと出てくるのかもしれない。

3 まとめと今後の課題

- ・調べるときに使う資料によって結果が異なってくる可能性があり、注意が必要です。
- ・宝立山にはチシマザサとしてよさそうなものがありますが、能登での自生は少ないと思われます。エゾネマガリを含めたオクヤマザサの存在については、観察地点を増やして調べる必要があります。これは、古いチシマザサの開花標本が存在する、まだ未観察の鉢伏山についても同様です。
- ・オクヤマザサを最も広義のもの（上記の複合体）にすると、標高の低い所から高い所まで、かなり広範囲に分布しているのではないかと考えられます。宝立山と鉢伏山（未観察）以外は、広義のオクヤマザサが多いようです。

初夏の林床でサイハイランの花粉を運ぶトラマルハナバチ女王

石川県立大学環境科学科 北村 俊平

「ラン（蘭）」と聞くと開店祝いの華やかなコショウラン、あるいはハチに擬態してオスを騙す巧みな戦略を持つ種を思い浮かべるかもしれませんが。実は、石川県内の里山でも、さまざまな野生ランを見ることができます。私たちが2019年から金沢大学の角間里山ゾーンで向き合い続けている「サイハイラン (*Cremastra appendiculata* var. *variabilis*)」もそんな身近なランの一種です。

私が初めて本種の花を見たのは、2013年6月、同地でギンリョウソウの調査をしていた時でした。林床に1枚だけ広がるササのような葉、その根元から伸びた20cmほどの花茎には、10個以上の淡い紫褐色の花が咲いていました（写真1）。その翌年の2014年5月、調査中に偶然、両前脚に黄色い塊をつけたトラマルハナバチ女王がギンリョウソウを訪花しました（写真2）。その写真をSNSに投稿したところ、「これはサイハイランの花粉塊（花粉粒が集まったもの）だ」と教えられました。サイハイランの送粉者がトラマルハナバチ女王であることは知られていましたが、その訪花頻度は極めて低いとされてきました。しかし、目の前で花粉塊をつけた女王バチが飛ぶ姿を見たことで、「ここなら送粉生態を詳しく調査できるかもしれない」と研究の可能性に気が付いたのです。

とはいえ、10日間を超える開花期間中、十分なデータを得るために複数個体を同時に見続けるなど、体一つでは到底不可能です。「どうにかしてこの稀な現象を捉えることができないか？」ヒントになったのは意外なデータでした。石川県林業試験場での哺乳類調査の自動撮影カメラに、時折マルハナバチ類が写っていたのです。「これなら女王バチも撮れるかもしれない」そう考え、2018年に4個体のサイハイランにカメラを設置してみました。すると1個体で、見事に女王バチの姿を捉えられたのです。「4個体で撮れたのだから、もっと設置すれば十分なデータが得られるはずだ」。そう確信し、翌年の準備を進めました。

2019年、満を持して19個体のサイハイランにカメラを設置し、本格調査を開始しました（写真3）。ところが、自然相手の研究はそう簡単ではありません。十分な準備をして臨んだにもかかわらず、この年は一度も訪花が記録されませんでした。それでも、「稀にしか来ないからこそ、撮れるまで待つしかない」と調査を継続しました。



そして2020年、回収した動画を再生すると、そこには待ちわびた光景が映っていました。大きな羽音と共に現れたのは、やはりトラマルハナバチ女王でした（写真4）。彼女は花に潜り込み、蜜を吸った後、前脚に鮮やかな黄色の「花粉塊」をしっかりと付着させていました。そして次の株へと、花粉塊をつけたまま飛び去っていったのです。

2025年までの調査の結果、サイハイランの送粉を担っていたのは、トラマルハナバチ女王だけであることが判明しました。調査期間中には、コマルハナバチ女王やスズメガ類が訪れることもありましたが、花粉塊をつけることはなく、送粉には寄与していませんでした。巣作りや子育てに忙しいトラマルハナバチ女王にとって、他種の花が少ないこの時期の森で、サイハイランは貴重な蜜源となっていました。そしてサイハイランにとっては、彼女たちは花粉を運ぶ唯一無二のパートナーだったのです。

自動撮影カメラを用いた観察手法は、人の目による観察の限界を克服し、これまで捉えることが困難だった稀な送粉過程を明らかにしました。継続調査から、トラマルハナバチ女王のサイハイランへの訪花頻度は大きく年変動することも見えてきました。ただ、モニター越しには何度もその姿を確認してきましたが、まだ調査地でこの「決定的な瞬間」に立ち会えたことはありません。今年こそは自分の目で、トラマルハナバチ女王がサイハイランを訪れる瞬間を見たいものです。

さらに詳細について知りたい方は「Shimada, M., Suenaga, K., & Kitamura, S. (2026) *Plant Species Biology* 41(2), e70048」をご覧ください。どなたでも無料で読むことができます。

石川県内の両生類について最近調べていること

石川県両生爬虫類研究会 石原 一彦

石川県内で記録のある両生類は23種(サンショウウオ類8種、カエル類15種)です。その中には、かほく市以北で能登地方に生息するホクリクサンショウウオ、加賀地方でも能美市と小松市だけで見つかったアベサンショウウオが含まれます。また、2022年に新種として記載されたホムラハコネサンショウウオは、小松市内の山地でも記録されています。

ここでは、石川県内における両生類について最近、私が調べていることについて、2つ書いてみたいと思います。

1. ヌマガエル

ヌマガエル(写真1~2)は最近、石川県内にも生息していることがわかった両生類です。このカエルは、もともと本州の中部・関西地方以西、四国、九州、先島諸島を除く南西諸島に分布していますが、この他に国内外来種として関東地方にも広く分布が知られています。

石川県内では2023年の秋に志賀町の一部でヌマガエルが確認され、石川県立自然史資料館研究報告で報告しました(石原、2024)。また自然史資料館学芸員の嶋田さんらによって遺伝子的にもヌマガエルであることが確かめられました。ヌマガエルの外部形態の特徴は次の通りです。

- ①背面に背中線も背側線も認められない。
- ②背面の色は一様に灰褐色で黒褐色の斑点があり、短い隆条が点在する。
- ③腹面は白色で目立った模様はない。
- ④前肢と後肢の指に吸盤が無い。

ヌマガエルは先述の国内分布の状況から、石川県内の個体群は国内外来種と考えられます。見つかる個体の体サイズから繁殖していることは確実です。肉食性であるため、在来の小動物を捕食する影響が懸念されます。今後、志賀町における分布状況、特に河川流域に沿った分布の広がりを調べていきたいと思っています。また石川県内の他の市町にヌマガエルが分布していないかについても調査を進める必要があります。

2. 医王山の両生類

医王山は金沢市の東部から富山県の県境に位置しており、標高939mの奥医王山を最高峰とし、南北9km、東西5kmほどの広がりがあります。医王山の両生類では、三蛇ヶ滝で見られるハコネサンショウウオ(写真3)が有名です。ハコネサンショウウオは流水環境(溪流など)で見られるサンショウウオ類ですが、この他にも、医王山に数ある登山道の脇で沢をのぞき込むとヒダサンショウウオ(写真4)という別の

種類のサンショウウオが見つかることもあります。

大池平ではモリアオガエル、アカハライモリなどの止水環境を好む両生類の姿を目にすることができます。他にツチガエルの大きなオタマジヤクシ(写真5)が見つかることもあります。

昨年6月、医王山ビジターセンターから大池平まで歩いた時のことですが、大沼の中でトノサマガエルの鳴き声を聞きました。その帰り道、登山道脇にある湿地でトノサマガエルの姿を見つけることができました(写真6)。水田環境を好むとされるトノサマガエルですが、山地でも見つかったことで大変興味を覚えています。

医王山一帯にはクロサンショウウオ、ヤマアカガエル、タゴガエルも生息し、他にも溪流ではナガレヒキガエルの記録があります。医王山はよく知られた地域ですが、両生類の記録は意外とまとめられた物が無いようです。さらに調査を進め、記録を整理してみたいと考えています。小河川に生息するナガレタゴガエルというカエルが白山地域から北は犀川上流域まで生息が知られていますが、このカエルが医王山の山系に生息しているのか否か、これも調べてみたいテーマです。

最後になりますが、ここで少し紹介しましたヌマガエル、また医王山の両生類について、確認情報がございましたら、私、石原までご教示をいただけたらと思っております。

参考文献

- ・石原一彦(2024)石川県能登地方におけるヌマガエル *Fejervarya kawamurai* の分布記録. 石川県立自然史資料館研究報告 12: 11-15.
- ・嶋田敬介・鎗田めぐ(2025)石川県に生息するヌマガエルのミトコンドリア Cytb 遺伝子の解析. 石川県立自然史資料館研究報告 13: 103-107.



写真1 ヌマガエル成体の背面の様子



写真2 ヌマガエル成体の腹面の様子



写真3 ハコネサンショウウオの幼生

(背面に明瞭な背中線と背側線があるトノサマガエル(写真6)と比較してみてください)



写真4 ヒダサンショウウオの幼生



写真5 ツチガエルの幼生



写真6 医王山で見つかったトノサマガエル

第54回いしかわ自然観察会報告

福井県年縞博物館^{ねんこう} 見学バスツアー

石川県自然解説員研究会 池田 成夫

10年ほど前、学芸員の桂先生のお誘いで石川県自然史センターの個人会員となりましたが、仕事や石川県自然解説員としての活動などもあり、今まで自然史センターの自然観察会に参加することができませんでした。

今般、12月14日(日)実施の福井県年縞(ねんこう)博物館(福井県三方上中郡若狭町)見学ツアーの案内を頂戴し、三方五湖の一つ、水月湖で11年ぶりとなる年縞掘削が行われたことをマスコミ報道により知っておりましたので、ぜひ参加したいと思っていたところ、幸い他の行事と重ならず、これに参加することができました。参加者は計30名でした。



福井県年縞博物館

さて、「年縞」という変わった言葉。この博物館は水月湖の湖底堆積物を掘削して展示しています。そのしましま模様を年縞と呼ぶそうです。

湖が断層活動により形成され、今も湖底が下がり続けている、直接流入する河川がないため湖水の攪拌がないなどの奇跡的な自然条件のもと、過去7万年分の堆積物が厚さ45mにわたって堆積し、世界でも例を見ない貴重な資料となっております。

縞の1枚は平均0.7mm。この中に珪藻やプランクトンの化石、噴火による火山灰や花粉などが含まれています。

これが7万年分欠けることなく連続しているので、上から年縞を数えればすべての縞の年代がわかるとのことで、7万年の目盛りがついた「ものさし」になっているとのことでした。



水月湖年縞7万年ギャラリー

この「ものさし」を使って、世界最大級の鬼界カルデラ噴火や鹿児島湾を形成した始良カルデラ噴火の正確な年代が特定できたという展示があったり、花粉により植物の種類が特定でき、これによって過去の気候がわかるとの展示もあって、この度の自然観察会は私にとって、とても興味深いものとなりました。



始良カルデラ噴火に係る展示

最後に紙面を拝借して、私ども石川県自然解説員研究会の活動を少しだけ紹介させていただきます。

白山を始め、能登・金沢・加賀・医王山の各地区において自然観察会を開催しておりますので、関心のある方におかれては、ご参加いただければ幸いです。

詳細は、下記のホームページからどうぞ。

<https://kaisetuin.jimdofree.com/>

自然史エッセイ 自然史エッセイ 自然史エッセイ 自然史エッセイ 自然史エッセイ 自然史エッセイ 自然史エッセイ 自然史エッセイ 自然史エッセイ 自然史エッセイ

自然史エッセイ

「能登半島地震後の 能登島の自然環境」 源内 伸秀

地震で自宅は中規模半壊、3月末公費解体、
建築費高騰の為一部残す箇所を自らリフォーム中



私は七尾市能登島長崎町（能登島東部）に住んでおり、30代頃から能登島の自然環境に興味を持ちました。詳しくはありませんが植物を中心に、動物も少々仕事の合間に調べる生活をこれまでしてきました。

能登島は周囲72キロ海拔197m、七尾湾（西湾・南湾・西湾）と富山湾に囲まれた島です。島の中・北部は安山岩などの火山岩、東・南部は泥岩、珪藻土で構成されています。海岸線はリアス海岸特有の入り江が多く、また溺れ谷が内陸部にまで入り込み、なだらかな丘陵地が広がり、ため池も多く山と海が隣接する穏やかな島です。このような自然環境から島特有の動植物がみられ、また住民の生活の基盤は昔から半農半漁が中心だったことからこの豊かな自然環境がこれまで維持されてきました。

2024年1月1日、能登半島地震が発生、家屋は多く倒壊し、失われた人命もあり未曾有の大災害となりました。自然環境にも甚大な影響があり、能登島は30～50cmの地盤沈下（内浦は地盤沈下、外浦は隆起）崖地の落石・崩落、尾根筋の亀裂・倒木など稀少な植物の自生地が消失、特に地盤沈下による影響で海水が内陸部まで浸水し、カワジシャなどの稀少な自生地が消え、また微妙な塩分バランスによる塩性湿地植物群落にも影響を与えているようです。また、能登島を代表する植物イワタイゲキ（日本の

最北限・県絶滅危惧I類）岩盤の崩壊により数株が枯れ、断崖地に通年営巣していたハヤブサも断崖の崩落により震災後の営巣の有無が確認できていません。その他、留鳥であるはずのウミネコが震災後に姿を消し、何処へ集団移動したのやら奇怪な現象も起きています。震災後、十分な調査がなされておらず、2030年に向けたレッドデータブック調査と合わせて早急に調査と体制を進めていきたいと考えます。

2011年世界農業遺産に認定された「能登の里山里海」その要因の中に生業の維持管理が生物多様性の保全に繋がっていることが証明されました。近年、震災の影響と別に能登島で従来生息していなかったイノシシ・ツキノワグマ・ニホンジカなどが能登島に現れ、特にイノシシの定住と昨年、ニホンジカのつがい確認され、他県でシカの食害により稀少植物への被害が心配されています。昨今、先の獣害と過疎高齢化の要因で耕作放棄地の増大と里山の管理放棄、さらに能登半島地震など「能登の里山里海」の維持存続においても、生物多様性の保全は前途多難な時代を迎えてきていると思います。

また、レッドデータブック記載種以外で従来普通にみられた植物も、近年消失の一途をたどり、その地域において総合的な調査・保全対策と体制を構築していく必要があると思います。貴重な動植物を守り残していくにはその環境を守っていくことと同時に土地を担保していくことが今後大前提となっていくと考えます。能登島において自然環境の拠点づくりとして、自分の夢でもあります民営での「(仮称)能登島自然保護センター」の立ち上げへの思いから、自分ごとですが幾つかの仕事の掛け持ちしている中で塩づくりと塩づくり加工品を仲間と一緒に現在行っています。里山から塩づくりの燃料となる薪を調達し、できた塩で山菜の塩漬けの商品化を進め、生物多様性の保護と生業創出のモデルとなる地域になることを今後目指していきます。



能登島を代表する植物 イワタイゲキ（日本の最北限）
震災で岩盤が崩壊して数株枯れる



通年、ハヤブサの営巣地
能登半島地震で崩落して震災後の営巣が未確認

自然史エッセイ 自然史エッセイ 自然史エッセイ 自然史エッセイ 自然史エッセイ 自然史エッセイ 自然史エッセイ 自然史エッセイ 自然史エッセイ 自然史エッセイ

INFORMATION

■ 第55回いしかわ自然観察会

テーマ：大聖寺 錦城山の歴史探訪と山の文化館
実施日：2026年5月31日(日)

行き先：錦城山(里山の植物・鳥の観察)、山の文化館(深田久弥の生誕地)など

定員：参加費2000円、どなたでも参加できます。申し込みは自然史資料館へ電話またはFAXで。

発行/特定非営利活動法人石川県自然史センター 編集/いしかわ自然史編集委員会
〒920-1147 金沢市銚子町リ441番地 (石川県立自然史資料館内) TEL.076-229-3403・3450